

風流

早稲田大学 研究院教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

夏目漱石ゆかりの地

私事で恐縮だが、三月末に長年勤めた東京大学を定年退職し、四月からは早稲田大学でもうひと頑張りさせていただくことになった。誠に有難いことである。

早稲田大学には、新宿区内だけでもいくつもキャンパスがあるが、私の部屋は喜久井町キャンパスというところにある。古い割に広くは知られていないキャンパスだ。私もここに来るまでその存在すら知らなかった。

その敷地は東京都新宿区の夏目坂通りと早稲田通りという二つの道に面しているのだが、この夏目坂

新妻の鏡子に宛てた手紙のなかの文章で、次のようなものだった。

「当地には桜というものがなく、春になってももの足らぬ心地に候。かつ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣きもこれなく、文明がかくの如きものならば、野蛮の方がかえって面白く候。」

この漱石のロンドン評にある「野蛮の方」とは、すなわち、当時欧米列強から学び取ろうとした彼の地の文明に対して、日本の元々の文化のことを、いわば単純な脱亜入欧の風潮を皮肉る形で、自虐的にそう称したのだろうが、当時から一二〇年を経てすっかり「文明」化した今の日本では、なかなかその「野蛮の方」の姿を見ることは難しくなっている。

春のある時期に桜こそ咲いているものの、町中にあつては、漱石に「無風流なる事物と人間のみ」と言われても致し方ないような風景ばかりが目立つ。

私自身が真っ先に無風流の誹りを受けるべき人種なのだが、それでも「雅と申す趣き」の感じられる桜

というのが夏目漱石の名字をとったもので、このあたりの名主だった漱石の父・直克が名付けたものだと言われている。更に、喜久井町という町名も直克が夏目家の家紋「井桁に菊」にちなんで付けたものらしい。実際私のいる喜久井町キャンパスの入り口の近くに夏目漱石の生家跡がある。

更に通用門の面する早稲田通りからは漱石山房通りという細い道が始まっていて、これをしばらく行くと、漱石が多くの小説を執筆し、また寺田寅彦や内田百閒や芥川龍之介などなど、多くの弟子や文化人が定期的に集ったこと（「木曜会」という名が付いていた）でも知られる「漱石山房」の書齋などを再現し

展示している「新宿区立漱石山房記念館」もある。

文明と野蛮

それにしても、今年の桜の開花はとても早かった。残念ながら、私が喜久井町に引越してきた時には、すっかり葉桜に変わってしまったが、この桜について喜久井町ゆかりの漱石が面白い文章を残している。手紙文化研究家の中川越さんが、四月十一日のNHKラジオ深夜便、「文豪通信」のなかで教えてくれた。

それは、一九〇二年四月十七日、当時ロンドンに留学中だった漱石が

に黒味を帯びた古い方の壁が全体の色調を引き締め、そこに瓦の銀鼠色、明るい黄色系の簾と土壁による水平の帯がアクセントをつけ、窓の奥の漆黒を背景に後姿を見せる芸妓さんの着物の紫がかかった白が浮かび上がる。その手前の近景で古木の黒と松の葉の緑がクロスし、そして満開の桜である。

色彩が豊かであることはもちろんだが、風景の構成要素それぞれの素材感が、手触りの感触を伴って伝わってくる。眺めていると鼻から大きく息を吸ってみたいくなる。祇園界隈の賑わいが聞こえてきそうだし、あの窓のなかに入って京料理を味わいながら酒を嘗めてみたいもなる。

五感に届く桜の風景。これこそ漱石の言う「雅」であり、「野蛮の方」なのである。さて、私たちはこんな「野蛮の方」の風景を創れるだろうか。二十一世紀の挑戦が待たれる。



7年前の京都祇園の桜

の写真の一枚や二枚は持っているだろうと試しに探してみたのだが、やつのことで見つけ出したのが今回の写真である。

何や、祇園かいな

七年ほど前に京都の祇園で撮った写真である。「何や、結局祇園かいな」という声が聞こえてきそうだ。無風流な私のせいかもしれないが、いくら私でもこういう風情のあ

る景色に出会えば、祇園でなくてもシャッターを切っていただろう。漱石に合わせる顔がないのは、私だけではなくて、都会に住む現代日本人、概ねすべてだろう。

実は私の無風流は問題で、白状してしまうと、この写真も当時一緒にそこにいた他の方が撮って、その方からもらったものである。それはともかく、この写真に映し出された風景はいかがだろう。新旧で色目の違う木製の壁。特